

## 1.2 大学図書館の役割

国立大学図書館協議会会長  
東京大学附属図書館長  
落合卓四郎

1. 大学図書館の基本機能は学術資料の収集、整理・保存、提供であり、この機能を大学のために具現するのが大学図書館の役割・使命と考える。その具現の内容、仕方は大学により、また時代により大きく変わり得る。いま社会は大きく変わりつつあり、社会の一員である（国立）大学も大きな変革を余儀なくされている。この時期の大学図書館の使命を、下記の視点から述べてみたい。
2. 新しい学術・研究分野の創造とボーダレス化が急速に進んでいる。21世紀の分野といわれる生命、環境、情報などの分野で象徴されるように、今や学術・研究のフロンティアでは、19世紀的デシプリンで括ることができず、いわばボーダレス化は当然のこととなっている。このような研究動向に、古典的なデシプリンで対応してきた、大学図書館の使命はどう変わるのか？
3. IT革命の中で、学術情報の急速なデジタル化とそれを運ぶインターネットに代表される情報伝達手段の整備は、冊子体学術情報の宿命であった、時間的・空間的制約を一挙に取り払い、リアルタイムで必要とする情報にアクセスすることが可能になった。オンラインジャーナルなどは、図書館を経由せず直接アクセスが可能である。冊子体情報を前提としてきた大学図書館の使命はどうか変わるのか？
4. すべからく、グローバル化を言われる中で大学（行政改革のおり国立大学は特に）大きな変革を求められている。もっぱら研究・教育に専念できた時代から、今や、学習・教育研究、社会人教育、国際交流、社会貢献を大学が自主的に決めたバランスをもって実行し、その企画・立案、経過と結果を情報公開と説明責任の原則の基に、自己評価と外部評価を行う時代になりつつある。大学の研究・教育活動の補助的役割をもっぱらにしてきた大学図書館の使命はどうか変わるのか？
5. 国立大学は設置者である国（文部科学省）の保護の下に、大学を経営する概念を持たずにやってこれたと言える。しかし行財政改革のなかで独立行政法人化などの検討を通して明らかになりつつあるのは、大学は今まで避けてきた経営の視点を導入することを余儀なくされると言うことである。その前提として上記4.に述べた大学それぞれに求められるバランスがあると言える。今まで経営と言う概念すら持ち合わせてこなかった図書館は、経営の基本である費用対効果の視点から、大学図書館の使命をどう確保するのか？